歌わずに合唱文化を継承させるために

先週の金曜日の前期終業式において、合唱発表会中止を全校生徒に告げました。今回も私の中には心苦しさだけが残りました。大きな学校行事が全て変更や中止になり、新型コロナウイルスのせいだとは言え、学校の責任者としてはつらいものがあります。せめて卒業式だけは、全校で取り組めるようにと、今は切に願っています。

前期の〇合唱委員長は、合唱を復活することを信じ、いつそうなってもよいように楽譜に関係する知識だけは身につけさせたいと考えて取り組みました。歌声のない朝や帰りの会に合唱の準備を位置づけた活動でした。

後期の生徒会専門委員長が決まりました。そして、合唱発表会中止が決まりました。後期のT合唱委員長はどのように活動を展開するのでしょうか。歌えない朝帰りの会が続く状況と、合唱発表会が中止となった現実を受け止めてどのように活動を進めるのでしょうか。

歌えなければやる意味がない。歌えない状態では何も取り組めない。そんな声が聞こえてきそうです。後期も、前期と同じように楽譜の記号を理解するだけの活動では、正直言って新鮮さに欠けることでしょう。T合唱委員長は後期の活動をどのようにするつもりなのでしょうか。注目が集まるところです。

合唱は歌声として表現するものですが、学校においては、教育の大きな柱の一つとして位置付いている文化活動です。したがって、異学年の生徒たちが関わり合って、継承すべきものだと私は思います。

そう考えたときに心配なことが、一つあります。それは現一年生に、合唱をどのように根付かせるかです。つまり、歌声としては表現できませんが、北中学校の合唱を、一年生の耳や目、そして、心に焼き付けるかです。

歌えなければそれはできないのでしょうか。確かに、一年生の前で、三年生の迫力ある歌声を聞かせられません。だったら、一年生に合唱を焼き付けることはできないのでしょうか。合唱という瑞浪北中の文化は継承できない、と手をこまくだけではいけませんよね。

そこでしょうね。そこにどんな生徒会活動を展開するのかですね。三年生に残された時間は実質四ヶ月。一年生に文化を残すためにどのように取り組むのでしょうか。（十月十二日　記）

会長から任命書を受け取る委員長たち